

異世界戸建て精霊つき

## 商人

近くの町の店の主人。

## ダン

近くの町の門番。

## ルーチェ

沙菜が見つけた  
洋館にいた精霊。  
沙菜に魔術師として  
契約するよう迫る。

## 登場人物 紹介

## ラビナ

町の屋台の女店主。  
快活な性格で  
沙菜の世話をやいてくれる。

## セオ

森の中に倒れていたのを  
沙菜が助けた青年。  
訳有りのようで、  
しばらく一緒に暮らすことになる。

## 木下沙菜

田舎暮らしが大好きな女の子。  
タケノコ狩りの最中に  
突然、異世界にトリップしてしまった。  
どうやら魔術師の才能が  
あるらしく――

## 第一章 ボロ屋敷の死にかけ精霊

「あ、あつた！」

春、竹が生い茂る山の中で、木下沙菜は足元の地面を見て明るい声を上げた。地面にヒビが入り、そこからタケノコの頭がほんの少しだけひょっこりと覗いている。

沙菜の三つ編みが肩に当たり、ぼんと揺れた。

タケノコ採りの手伝いに来た今日の彼女は、灰色をしたスウェットのパーカにカーキ色のカーゴパンツ、スニーカーという動きやすい服装をしている。春とはいえまだ肌寒い。だから、更にその上に、ナイロンのジャージの上着を羽織っていた。

「勘はにぶつとらんな、沙菜」

鍔のついた帽子を被った作業着姿の祖父——俊三がにやりとする。

「仕事がかどるから、助かるわあ」

祖母の絢子も朗らかな声を出す。

絢子は農園用の日よけ帽子を被り、日射しを完全にガードした格好をしている。手袋、長袖の上着、もんぺにスニーカーを合わせていた。唯一見えている目が笑みの形をしている。

「よし、掘っちゃうね」

沙菜はスコップで、地割れの周りをザクザクと掘っていった。

「腰が入っとらん」

「あんたもタケノコを見つけて、手本を見せてあげなさいよ」

すかさず口出しする俊三に絢子が言い、「あら、見つけた」と呟いて自分も掘り始める。俊三も負けじと周りを探して、タケノコ採りに精を出した。

この日、タケノコ採りのシーズンに合わせて、沙菜は実家から車で一時間の所にある父方の祖母の家にやって来ていた。

沙菜の父は田舎嫌いで、上京してそこを生活の基盤にしたが、沙菜は父とは逆に田舎好きだ。盆と正月以外は父の実家に寄りつかない両親の代わりに、たびたび祖父母の家を訪ねている。

三人はしばらく黙々とタケノコを採り、一時間程で一度休憩を入れることにした。

ひらけた場所に折り畳み椅子を並べて座り、絢子が水筒から出してくれた濃い緑茶を飲む。

この山は祖父母の家の真裏にあるのだが、いちいち靴を脱いで屋内に戻るのが面倒と、休憩の時はいつもこうしている。

「沙菜ちゃんが手伝いに来てくれて、本当に助かるわ。まったく、息子が三人いて孫は五人もいるのに、顔を出すのは沙菜ちゃんだけってどういうことかしらね」

絢子はぼやきながら四角いプラスチック容器の蓋を開けて、沙菜に漬物を取るよう促した。

絢子の漬けた大根は絶品だ。沙菜は添えられた箸で二枚を摘まんで、すぐに口に放り込む。甘じょっぱい独特な味が口の中に広がり、沙菜は頬を押さえた。

「おいしい」

「そう？ 嬉しいわあ。包んであげるから、明日、持って帰りなさいね」

「うん、ありがとう。おばあちゃん」

沙菜がにへらつと笑うと、絢子も相好を崩す。

俊三はしかめ面<sup>しかめづら</sup>で漬物を頬張っているが、次々に食べているので、表情と違っておいしいと思っているのだろう。沙菜と目が合った俊三はちよつとぼつが悪そうに咳払いをし、口を開く。

「沙菜、来てくれるのは助かるが、無理してるんじゃないか？ 負担になるなら気を遣わなくていいんだぞ」

「ううん、好きで手伝ってるから気にしないで。今回はタケノコを持って帰るのが楽しみでね」

「おう、売り物にならない小さいやつなら、どんどん持って帰るといい。沙菜が世話になってる食堂の分は、良いのを取り分けておくからな」

俊三の言葉をありがたく思っていると、絢子がまた口を挟む。

「あんた、食堂じゃなくてカフェよ。カフェ」

「食事する所なら食堂だろうが」

頑固に言い張る俊三に絢子は呆れた目を向けて、沙菜に肩をすくめてみせる。

「それでどうなの、カフェのほうは」

「うん、良くしてもらってる。私がアクセサリー職人を目指してるって話したら、販売スペースを設けてくれたの」

沙菜は弾んだ声を出す。

専門学校のジュエリーコースで二年学んだ後、彼女はカフェの店員をしていた。その傍らで、地道にアクセサリーを作っては、手作りの品を売買するサイトで売っているのだ。

「二十三歳じゃあまだ若い、好きなようにする方がいいが……無理そうなら早いとこまともな職に就けよ。それが結婚しろ」

「までもって何よ、あんたったら。そんな言い方は無いでしょう」

俊三の言葉に眉をひそめるものの、絢子も後半には同意した。

「でもそうね、結婚はいいかもしれないよ」

「はは、まあ、そのうちね」

沙菜は苦笑いで話を誤魔化す。ちょうど一ヶ月くらい前に彼氏と別れたばかりなので、あんまり恋愛について考えたくなかったのだ。

「ねえ、そろそろ続きをしようよ」

絢子の用意した弁当ボックスに空のカップを戻しながら、沙菜は祖父母に声をかける。

「ああ、そうだな。昼までにもうひと頑張りするか」

「涼しいうちのほうが楽なものね」

俊三が立ち上がって伸びをし、絢子がカップや漬物の容器を片付ける。

自分にとって居心地の悪い話が終わり、沙菜はほっとした。



「あれ？」

それから沙菜はせつせとタケノコ採りをしていたが、ふと顔を上げて驚いた。タケノコを穴から取り上げた格好そのまま、呆然と周りを見回す。

「おじいちゃん？ おばあちゃん？」

いったいどういう訳なのか、さっきまですぐ傍でタケノコ掘りをしていた祖父母の姿が消えている。

決して迷子ではない。祖父母は沙菜から三步と離れていない距離にいたのだ。見えなくなれば普通は気付くだろう。

沙菜はタケノコを抱えたまま、スコップとタケノコの入ったバケツを持って立ち上がった。山の斜面の下を覗く。

「嘘、家も無い！」

ついさっきまで、山の下には祖父母の家の屋根が確認できた。古びて青カビが浮かんだ瓦屋根だ。この異常事態に、沙菜の背筋は冷えた。

(まさかこれは、この辺りでは小さい頃に必ず聞く言い伝え——山神様の悪戯とか!?)

そんなことを思った沙菜は、すぐにその思いつきを笑った。  
(あれって、山に一人で入らないようにっていう、子どもを脅す為の迷信でしょ？ そんなことがあるはずないわ)

小さな子どもの頃でさえ、この距離で迷ったことは無い。  
毎年タケノコ採りの手伝いに来ているので、この辺は沙菜にとって庭みたいな物だ。

沙菜はまずは落ち着くことにして、深呼吸をした。持っていたタケノコをバケツに放り込み、軍手を外して、カーゴパンツのポケットに手をつ込む。そこからスマートフォンを取り出した。

「おじいちゃんに電話しよう。……あれ？」

すぐに発信してみたものの、ツーツーという無慈悲な音が聞こえてくる。

画面を見ると、圏外の表示になっていた。

「何で？ この山、電波が届くの……」

指先まで冷たくなった。

沙菜はスマートフォンをカーゴパンツのポケットにしまい、周りを見回す。

家を探しに山を下ろうかと迷うが、そこで幼い頃祖父母に教えられたことを思い出した。

「遭難した時は尾根に登れ、だったよね」

沙菜は口に出して言った。

闇雲に下りて、谷に落ちるほうが危ないらしい。上に進むのは怖いけれど、尾根を探して登り、上から道と人家を探すのだ。それに、見晴らしの良い尾根の上ならスマートフォンに電波が入るか

もしれない。そうすれば祖父母に助けを求められる。

山で危険な動物は猪だが、幸い沙菜には武器になるスコップがあった。左手でしっかりバケツを持って、山を登り始める。

だが、それから数歩も行かないうちに、急に辺りが白い霧で覆われた。

「霧？」

怖くなった沙菜は立ち止まる。

まだ周りがまったく見えない程ではない。もう一度上を目指し、再びしっかりした地面を選んで歩いていく。誤って藪に突っ込むことを覚悟していたが、数歩進むと、さあっと霧が晴れた。

まるでカーテンを開けたかのようだ。

「……は？」

霧を抜けると、北欧風の針葉樹の森が広がっていた。

沙菜は一度、目をつむってみる。もしかしたら遭難の恐怖のあまり、白昼夢か何かを見ているのかもしれないと思ったのだ。だが、そこにあるのはやはりヨーロッパを思わせる深い森だった。

「た、竹は!?」

空も見えないくらい生い茂っていた竹藪がかけらも見当たらない。

「山はどこに行っちゃったの？」

確かにほんの数秒前まで、沙菜は山の坂の途中に立っていた。道が傾斜している為に踏ん張っていた足の力みをよく覚えている。だというのに、今いるのは平坦な地面の上だ。

おかしい。

どう考えたって異常だ。

「やっぱり夢を見てるのかも……イダッ」

沙菜は自分の頬をつねってみる。手加減をしなかったので、すぐに強烈な痛みが襲ってきた。しばらく頬を押さえて沈黙する。

そして痛みが遠のくと、じわじわと不安が押し寄せてきた。

夢ではない。まさか狐に化かされてもいないだろう。それなら残る答えは——現実だ。

理解を超えたとんでもないことが、自分の身に起きたということになる。

「そうだ、現在地を調べればいいのよ」

沙菜は再びスマートフォンを取り出した。だが、またもや圏外という表示に、あつさりと期待が打ち破られる。他に頼れるのは、祖父母にさずけられた知恵くらいだ。しかしこれも今回は役に立ちそうにない。

「どうしよう、おじいちゃん。尾根が見当たらないよ……」

沙菜は途方に暮れた。周りを見回しても、看板すら無い。

訳が分からなすぎて泣きそうだ。実際、目尻に涙が浮かんできた。

「こんなことなら、森で遭難した場合についても聞いておけば良かった」

この事態を想定するのは無理だったが、呟くにはいられない。

それにしても何て静かな森だろう。

梟に似た鳥の不気味な声が時折聞こえる他には、ざわざわとした葉擦れの音しか聞こえない。

昼間だから周りがかるうじて見えるものの、鬱蒼と生い茂った木立に隠れ、太陽がどこにあるかは分らない。

太陽の傾きが判明すれば、大雑把な時間帯や方角を知れたのに残念だ。

「道も見当たらないわ」

人が歩けば道ができるのに、その痕跡も無い。

沙菜がこの森をどうにも不気味に感じるのは、人の気配を感じられないせいだ。

「あ、方位磁石はどうか」

スマートフォンを操作して、沙菜は方位磁石のアプリを開いてみた。スマートフォンを購入した時からインストールされていたアプリだ。だがエラーが出てまったく使えない。

バッテリーの消費を恐れた沙菜は、ひとまずスマートフォンの電源を切った。

命綱であるスマートフォンをカーゴパンツのポケットに丁寧にしまうと、沙菜は大きく息を吸い込み、口元に両手を添えて叫ぶ。

「誰かいませんかー？」

三回叫んでみたが、返事は無い。

それどころか鳥の声がやみ、森は更に静まり返った。

先程よりも不気味さが増し、沙菜はますます泣けてくる。

「怖いけど、泣くより他にすることがあるわ。家を探すのよ」

沙菜は声に出して言い、自分を奮い立たせた。

泣くと体力を使う。ここでそんなエネルギーを使うのは自分の為にならないだろう。それに時間をもつたいたい。明るいうちに人のいる所まで行かなくてはまずいのだ。

もし力尽き倒れたとして、人気がまるで感じられないこの森では、沙菜を見つけてくれる人が現れる可能性は皆無に近いようにしか思えなかった。

「どっちに行こう」

迷った沙菜は、足元に落ちていた枝を立て、倒れた方向を見つめる。

「よし、あっちだ」

運に任せ、沙菜は森の中を歩き出した。

あれからどれくらい歩いただろうか。

沙菜はいまだに森の中を彷徨っていた。

一周回って元の地点に戻ってきていると言われても信じてしまいうに違いない。それくらい、代わり映えない景色が続いている。

「これってモミの木かなあ。いや、違うか。似てるけど……」

茶色の幹に深緑の葉が垂れ下がる枝を眺めて、沙菜は呟いた。

独り言でも言っていないと恐怖に負けそうだ。

枝から視線をずらした沙菜は、その木立の向こうに家の屋根らしき物を見つけた。

「家だ！ やったわ！」

ようやく見つけた人家に、顔を輝かせる。歩きすぎによる足の痛みも忘れて、そちらに走り出した。

辺りは徐々に暗くなりつつあり、夜が迫っている。焦りが背中を押した。

「タケノコをあげたら、一晩泊めてもらえるかな」

呟いた言葉に、沙菜は笑ってしまう。タケノコなどなくても、助けを求めれば助けてくれるだろう。警察を呼んで、自宅に送ってもらえばいいのだ。

沙菜は膝丈の茂みを突っ切って、道へ飛び出した。

「道だ！ ここ、国道何号線かな」

苔むした古い石畳の道だ。標識を探したが、私有地の中なのか、そんな物は見当たらない。場所が分かる物が無くてがっかりしたもの、それよりも家だ。

道の先を追って右を向く。赤錆が浮いた黒い鉄の門扉と石塀の向こうに屋敷があった。

何とも陰気な雰囲気、漂う屋敷である。

灰色がかった緑色の壁はうろこに似ていて、屋根は黒い。幾何学模様をえがく窓枠は白く、ガラス窓は西日を反射して光っていた。

「珍しい形の家だわ、お金持ちの趣味かしら」

家の前にある空き地の草がぼうぼうで、荒れているのもつたいたい。花が咲いていたらさぞ綺麗だっただろう。

沙菜は様子を窺ったが、この二階建ての屋敷には人が住んでいる気配が無かった。

「別荘だったらどうしよう……」

こんな森の奥にある屋敷だ。住人は休暇中にしか滞在しないとしても納得できる。

ひとまず声をかけてみよう、と、沙菜は門の脇にあるだろうインターホンを探した。けれど、ここにも見当たらない。

「すみませーん！」

思い切って、屋敷に向かって叫んだ。少し待ってみたものの、中からの返事は無い。

沙菜は後ろを振り返った。針葉樹の森と屋敷、どちらで夜を過ごすかと問われれば、後者を選ぶ。誰かいるなら助けを求めればいいし、いないなら玄関ポーチの下でもいいから野宿させてもらおう。住人が戻って来て不法侵入だと怒られても、迷子になったと正直に話せば分かってくれるはずだ。

沙菜は覚悟を決めて、門扉を押し開けた。

「お邪魔します」

錆が浮いているわりに、門扉の動きは滑らかだった。誰かが手入れをしている証拠だ。人がいることを期待してもいいかもしれない。

敷地内に入ると、手を離れた扉が背後でガチャンとけたたましい音を立てた。思ったより音が響き、沙菜はビクリと首をすくめる。音を聞きつけた住人が出てこないかと期待したが、何の反応も無い。

「失礼しまーす」

声はかけたぞと思いつつ、沙菜は屋敷のほうへ踏み出す。

屋敷の前の空き地は、元は花壇と畑だったようだ。枯れた植物の根元が等間隔に突き出ている、周りに雑草が生えている。

屋敷に近付くにつれ、沙菜の不安が増した。

「何か廃墟みたい」

うろこ状の壁には蔦が這い、窓は割れてボロボロのカーテンが覗いている。部屋は暗く、誰もいないように見えた。

正直、迷子でなければ、絶対に近付きたくない場所だ。ホラー映画に出てくるお化け屋敷のようだと、まずい想像が頭を過り、沙菜は慌てて深く考えるのをやめた。余計に怖くなる。

玄関ポーチの脇にバケツを置き、変質者対策の為スコップを両腕に抱えて、扉をノックする。

「すみませーん、誰かいませんか？ すみませ……きやつ」

聞こえるようにと、扉をガンガン叩いていたら、その衝撃で扉が外れ、中へ倒れ込んだ。

慌てて後ろに飛びのいた瞬間、バターンとものすごい音を立てて扉が地面を叩き、埃が舞い上がる。

「げほつごほつ」

埃のせいで咳き込みつつ、沙菜はその惨状に青ざめた。

「嘘。やばっ、壊しちゃった。わああ、すみませーん！」

この程度で壊れるなんてと衝撃を受けながらも、大きな声で家主を呼ぶ。しかし、やはり屋敷は静まり返っていて、何の返事も無い。

「誰もいないのかな」

沙菜は出入り口から中を覗き込む。

薄暗い玄関ホールは、もう何十年も訪れる人がいなかったかのようにくすんだ色をしていた。

正面のステンドグラスから、鮮やかな光が床へ落ちている。女神だろうか、羽の生えた美しい女が白い花畑の中で、微笑んでいるデザインだ。

「すみませーん、どなたかいらっしゃいませんか？ 道に迷ってしまつて」

沙菜は大きな声を出した。

扉を壊したと怒られてもいいから、人に会いたい。せめて管理人でもないだろうかと、沙菜は靴のまま中へ入る。

床を覆う絨毯は茶色っぽく見えたが、歩いた所を振り返ると、埃が払われたそこは赤みがかつていた。元は赤色だったらしい。

天井から下がるクリスタルのシャンデリアには、蜘蛛の巣が張っている。もし綺麗に整備されていたら、さぞかし素晴らしい物だっただろうにもったいない。

——カタン。

その時、遠くで物音がした。沙菜はビクツと足を止める。音は左の廊下から聞こえた気がする。そちらを振り返るが、誰もいない。

「すみません！ このうちの人はですか？」

呼びかけるものの、反応は無い。もしかしたら風で何かが倒れた音かもしれない。

沙菜はとりあえず確認しようと、音のしたほうへ歩き出す。

スコップを構え、恐る恐る進む。

廊下も埃を被り、開いている扉から見える部屋はどれもボロボロだ。突然住人だけがなくなつたみたいに、生活感のある家具や物がそのまま残され、蜘蛛の巣に覆われている。

——カタン。

また音がした。

「何だ、これの音か」

廊下の窓が開いていて、それが音を立てた。

音の正体にはっきりとする反面、沙菜はがっかりした。やはりここは廃墟なのだろうか。

「ん？」

振り返ると、奥の部屋の扉が少し開いていた。隙間から見えたのは、玄関ホールで目にしたようなステンドグラスの温かい光だ。

今度は壊さないようにしようと、沙菜は慎重に扉を開き、中を見て目を丸くした。

「綺麗な部屋」

まるで教会の聖堂を思わせる部屋である。

細長い窓は全てステンドグラスで、赤や黄の光が室内に降り注いでいた。

教会と違うのはベンチや祭壇が無いことだ。代わりに、沙菜の腰の高さくらいの木が部屋の真ん中に植わっている。不思議なことに、その木の葉は淡い緑に光っていた。

「何これ、LEDライト？」

木の形をした照明だろうか、沙菜はそちらに近付く。

そして、ひっと息を呑んだ。

部屋の入り口からは見えなかったが、木の前に十歳くらいの男の子が座っているではないか。それも姿は真っ白で、向こう側の景色が透けている。顔がはっきり見えない白い人影は、沙菜を見上げた。

「助けて……」

地の底から響く、不思議なボーイソプラノの声がそう言った。

沙菜は驚きのあまり後ろに下がろうとしてつまずき、尻餅をつく。落としたスコップが、ガシャンとけたたましい音を立てる。

「ゆっ、ゆゆゆ、ゆゆゆっ」

震えて言葉にならない。

沙菜は男の子を凝視し、ひたすら意味の無い音を口にする。なぜだか真っ白な男の子と目が合った気がして、沙菜は甲高い悲鳴を上げた。

「出たああっ」

スコップを拾い上げ、脱兎のごとく部屋から逃げ出す。

廃墟に、幽霊。組み合わせとしてはありそうだ。しかし生まれてこの方、沙菜は幽霊なんて見たことがない。度胆どぎもを抜かれるには充分だった。

必死に走るうちに、途中でスコップを落としそうになり、慌てて抱え直す。もつれそうになる足を無理やり動かして、玄関から外へ飛び出した。

外はすっかり暗くなっており、空の端に淡い光を残した西日があとほんの少しで沈みそうである。

「人はいたけど、幽霊なんてっ。ひどいよ、神様！」

いったい自分に何の恨みがあるのだと、沙菜は空に向けて怒る。盆や正月にはちゃんと先祖参りもしていたし、氏社うじやにも詣もつでていたのだから、こういう時くらい助けてくれたっていいだろうに。

「何なの、もうやだ！」

タケノコ採りをしていて迷子になるわ、やっと見つけた家には幽霊がいるわ。どうしてこんな目に遭あうのだ。

恐ろしさにがたがたと震えながら、沙菜は後ろを振り返り幽霊がついてきていないか確認した。一刻も早くこの呪われた屋敷から立ち去らなくてはと、広い庭を門に向かって歩き出す。

（助けてなんて言う幽霊に、ろくな者はいないわ）

あくまでホラー映画での知識だが、とり憑つかれて殺されてはたまらない。けれど屋敷の敷地から出ていこうとして、大事なことを思い出した。

「あ、タケノコ！」

庭の途中で、振り返る。

幽霊が怖くて、玄関先とはいえ戻るのは躊躇したが、大事な食料だ。採り立てのタケノコは、生でも食べられる。心もとないがしばらくの食べ物にはなるはずだった。

玄関ポーチに戻った沙菜は及び腰でバケツを拾うや、走って前庭まで戻る。そしてほとと息を吐いたタイミングで、空の端にあった西日が消えて、周囲は夜の気配に包まれた。

暗くなったことに焦りを覚えた沙菜は、この後どうやって朝まで過ごそうかと考えながら門に向かう。

が、そこに予想外の物を発見し、歩みを止めた。

門の鉄柵の向こうに、真っ黒な毛をした巨大な犬がいたのだ。

「ガウツ」

「ひゃ!？」

吠え声にビクリとして、沙菜は門から離れる。

「グルルル」

犬は歯をむき出しにして、うなり声を上げていた。

「な、何？ でかつ」

犬にしては大きすぎる。

「ハスキーにしても大きいよね。気のせいか、狼みたい……」

日本では狼なんてとくに絶滅しているから、これは洋犬なのかもしれない。体長二メートルはあるだろう黒い犬は、闇夜に赤い目を爛々と光らせている。首輪が見当たらないので野良犬に違

ない。

（というか、こんなのが野良でいるのに、保健所は何をやっているの？）

犬は一匹だけではなかった。続いて四匹、森から姿を現す。

その時、沙菜は自分が屋敷に入った時のことを思い出して青ざめた。

沙菜が軽く押しただけで、門扉は開いたのだ。この犬だって簡単に敷地に入ってこられるはずだ。

（もしかしてここ、野犬の住処!？）

逃げ場を探すが、石塀は高く、沙菜にはよじ上れそうにない。背後の屋敷に戻るしかなさそうだ。

その時、目の前にいた巨大な黒い犬が、門に勢いよく体当たりをした。

「ひゃっ」

沙菜は思わずその場にしゃがんで、頭を庇う。

門を突破されて、犬に飛びかかれるところを想像し、ぎゅっと目を閉じた。しかし一向に足音

が近付いてこない。

「ん……?」

恐る恐る顔を上げると、犬は門扉にぶつかって、撥ね返されている。

「奇跡だわ。今のうちに逃げよう」

沙菜は急いで立ち上がり、出てきたばかりの屋敷に向けて走り出す。

巨大な犬と幽霊。どちらかなら迷わず幽霊を選ぶ。

あんなおつかない動物に噛み付かれるくらいなら、幽霊にとり憑かれたほうがマシだ。怖い思

はしても、痛くはないだろう。

屋敷の中に戻った沙菜は、壊してしまった扉をバリケード代わりに入り口に立てると、ようやくほっと息を吐いた。

「ふう、これでもう大丈夫……」

そして振り返り、目の前にあった白い顔に悲鳴を上げた。

「きゃああああ」

腰を抜かして、ぺたっとその場に尻餅をつく。スコップとバケツが床に転がった。

「やめてとり憑かないで！」

ひいいと体を丸くして身を守る沙菜に、幽霊の男の子が言葉をかけてきた。

「ひどいなあ、僕は幽霊じゃない。とり憑かないよ」

「そうよ、とり憑いて、夢枕に立って、さんざん脅かして衰弱死させ……ん？ 幽霊じゃないの？」  
両腕で頭を庇いつつ、恐々と見上げる。幽霊の男の子は宙に浮かんだまま大きく頷いて、優しい声で答えた。

「そうだよ。それに、ここにいれば大丈夫だ。あいつらは屋敷の中までは入れない」

「……え？ あの、あれ——外にいる黒いのお知り合い？」

我ながら訳の分からないことを訊いたが、幽霊は気にした様子もなく首を横に振る。

「知り合いではないよ、あれが何かは知ってるけど。あいつらはシャドウといって、影から生まれる化け物だ」

「ば、化け物……」

沙菜には幽霊の言うことが、とても珍妙に聞こえた。

「あなただって幽霊でしょ。仲間じゃないの？」

「幽霊じゃないって、僕は精霊。シャドウは新月の夜に影から生まれる化け物で、人や動物を襲うんだ。僕は誰も襲わない。ね？ 違うでしょ」

「しゃどう……せいいい……」

沙菜は馬鹿みたいに繰り返して、眉をひそめる。

「何を言ってるのかよく分からないけど……つまりあなたは私にひどいことをする気はないのね？」

「しないよ」

沙菜はほっとする。幽霊の話し方が穏やかだったので、嘘かもしれないとは思わなかった。

「ええと、それで影から生まれるって何？ 初めて聞いた」

「それはそうだろうね」

さも当然だと幽霊は頷く。

「君は異世界から来たんだから、聞いたことが無くても不思議じゃない」

「……は？」

聞き捨てならない言葉に、沙菜はぼかんと間の抜けた顔になった。

だが幽霊は沙菜の様子に気付かなかったのか、話を変える。

「そんなことより、僕、君に頼みたいことがあるんだ」

「待つて待つて！」

沙菜は大声で幽霊の言葉を遮った。

「今、異世界って聞こえたんだけど」

幽霊は首を傾げ、だからどうしたと言いたげな表情をする。

「言ったよ？　でもそれより大事な話があつて」

「いやいや、これ、かなり大変なことよ！　私にとつてはすごい重要！　だから質問に答えて」  
幽霊がさらりと流そうとするので、沙菜はいかに大事なことが訴えた。すると幽霊は渋々といったように沙菜の目の前に浮かぶ。

「仕方無いなあ。で？　何を訊きたいの？」

沙菜はぐるぐると混乱している頭を抱えた。幽霊と会話をしているだけでも驚きなのに、異世界なんて訳が分からない。

「異世界って、あれよね。小説や漫画に出てくるやつでしょ。どういうことなの？」

「そのままの意味だよ、異なる世界のことだ。ここはカレンドラ王国の東にある、グウインの森っていう場所なんだけど、昔から時空の歪みが起きやすいんだよね。それで違う世界の動物や物が、こつちに迷い込むことがある。君もそうだ」

「迷い込む……」

沙菜は自分の身に起きた不可解な出来事を思い出した。

「私、山でタケノコ採りをしてたら、急におじいちゃんとおばあちゃんとはぐれちゃったの。とり

あえず山の上を目指してみたら、霧が出てきて、それが晴れたら森にいたのよ」

「その時に歪みに入っちゃったんだろうね」

至極当然というように幽霊は結論付けたが、沙菜は納得できない。

「ちよつと待つて。あなたは当たり前みたいに言うけど、その時空の歪みってそもそも何!？」

沙菜が詰め寄ると、幽霊は頭を掻く。

「面倒だなあ、時間と空間が歪んでる場所のことだよ。君はそこに入ってしまったから、この世界へ移動してしまつたんだ。でも良かったね」

「どこが良いのよ」

幽霊の言葉に、沙菜はむつとした。だが、幽霊は気にしたそぶりも見せない。

「だって、時空の歪みの出口って、平坦な場所にあるとは限らないんだよ？　もし空に繋がつたら、君はどうなつてたと思う？」

「……落下死？」

ゾツとした。鳥肌が立った両腕を、手でさする。

「そういうこと。君はついてるよ、そして僕もついてる！　魔術師の素養がある人が迷い込んでくれたお陰で、死なずに済みそう」

何やら喜んでいる幽霊を横目に、沙菜は頭を整理した。

ここが時空の歪みを抜けた先にある異世界だということなら、色々と辻褄が合う。竹藪の山から突然、日本とは思えない針葉樹の森に出たのも理解できた。

外にいた大きな黒い犬が保健所に放置されているのも納得だ。スマートフォンがずっと圏外なのは、そもそも違う世界だから電波が届かないせいなのかもしれない。

じわじわと事態を呑み込んだ沙菜は、うんうんと頷いた。そんな彼女の前で、幽霊は両手を合わせる仕草をし、身を乗り出すようにして熱の籠もった態度で頼んできた。

「お願いだ、僕と契約して！ 僕の魔術師になつて！」

「ええっ!？」

沙菜は幽霊の勢いに面食らった。のけぞりつつ問い返す。

「魔術師？ いやあの、私、ごくごく普通の一般人なんですけど？」

「うん、今はね。でも、修業をすれば立派な魔術師になれるよ。僕の屋敷に辿り着けたんだもの、素質はばっちりだ」

「よく分からないけど、駄目よ。私は元の世界に帰るんだから。その時空の歪みっていうのを見て、また入れれば戻るってことでしょ？」

沙菜の指摘を、幽霊は鼻で笑った。

「本当に一般人の発想だねえ。時空の歪みっていうのはそんな簡単な物ではないんだ。精霊か魔術師の力を借りなければ、どこに飛ばされるやら分かったもんじゃない」

「そうなの？ それじゃあ、あなたは私を元の世界に戻せるってこと？」

「まあね。僕は太樹ヴェロニカの一枝の精霊だから。これらの魔術師より優秀だよ」

幽霊は自慢げに胸を張ったみたいに見えた。なにぶん透けているせいで表情がはっきり分からな

いので、仕草で判断するしかない。

帰宅できる希望が芽生えた沙菜は、先程の幽霊と同様祈るように両手を組んで、彼に詰め寄った。

「じゃあ、お願い！ 私を……」

「無理だよ」

全てを言い終わる前に、幽霊にきっぱりと断られた。沙菜はむっとする。

「まだ何も言っていないわ」

「言いたいことは分かっている。『私を元の世界に戻して』だろ？」

「そうよ。何で無理なの？」

「僕は死にかけてるんだ。だからそんな力は無い」

「へ!？」

目を丸くする沙菜の前で、幽霊は自分の胸をポンと叩いてみせる。

「ほら、透けてるでしょ？ 結構やばくてギリギリなんだ。あ、点滅してきた。すっごいやばい」確かに白い体が、切れかけの電球みたいに現れたり消えたりしている。幽霊は飛びつくようにして、沙菜の両肩を掴む仕草をした。だが沙菜には彼に触れられている感覚がない。

「お願い！ 僕を助けてくれたら、いずれ元の世界に戻してあげるから！ 契約して、僕の魔術師になつて！」

「お、落ち着いてよ。契約なんて物騒な頼み、すぐに頷ける訳無いでしょ！ 怪しすぎるわ」沙菜も幽霊に叫び返す。

「あなたが良い精霊なのか、それとも悪魔なのか、私には分からない。だいたいそういう頼みにはろくな物が無いって、童話や昔話に山程書いてあるよ」

「信じてって言っても難しいのは分かってる。でも君、ここを出て一人でどうするの？ シャドウに食われておしまいだよ。運良く町に着けたとして、異世界から来た君には生活するのも厳しいんじゃない？ その服、すごい変だから、怪しまれると思うよ」

「幽霊に変わって言われたくないんだけど」

思わず自分の格好に目をやった沙菜は、幽霊をじとりとにらむ。

「幽霊じゃないってば、せ・い・れ・い！」

幽霊は心外そうに言う。沙菜は眉間に皺しわを刻んだ。

「その精霊がまず分らないの！」

「ああ、これだから違う世界の人間は……。どこから説明するかな。ねえ、移動しながらで良い？ 僕、本気でやばいんだって」

「まあ、移動するだけなら」

沙菜は埃まみれの床から立ち上がった。カーゴパンツが真っ白になっていたので汚れを払うと、スコップとバケツを手に、幽霊の後をついていく。彼の言うように、彼の白い姿が現れたり消えたりしているので、それくらいは譲歩しようと思えた。

沙菜の少し前に幽霊は浮かび、滑るように空中を移動する。

「ここはさ、《大いなる葉》<sup>グラン・リーフ</sup>って呼ばれている世界なんだ」

「《大いなる葉》<sup>グラン・リーフ</sup>？」

沙菜は繰り返した。不思議な名前の世界である。

「そう、神様が落とした葉っぱが陸地になったって言われている大陸だよ。空から見ると葉の形をしているんだけど、精霊じゃないと分からないと思う」

「ふうん、世界地図を見られたら面白そうね」

「地図は偉い人しか持っていないよ」

幽霊は何を言ってるんだと怪訝けげんな声で返した。沙菜からすれば地図を見るのは普通だけど、ここでは違うらしい。

「この世界には、人間と精霊がいて、だいたい仲良く暮らしてる」

「何でだいたい？」

「人間同士がたまに戦争をするんだ。僕らはそれに巻き込まれて死ぬことがある」

「今みたいにひょいって飛んで逃げちゃえばいいのに」

沙菜の指摘に、幽霊はふふっと笑った。

「できないんだよ。僕ら精霊は、木に宿ってるんだ。といっても、どの木にも宿る訳じゃない。長い年月をかけてホウウを蓄たくわえた木に、ある日、生まれるって感じ。僕らは宿っている木の周辺しか移動できないし、木が死んでしまうと僕らも死ぬんだ。僕にとってはあれがそう」

沙菜は最初に幽霊と出会ったあの聖堂のような部屋に戻ってきていた。

幽霊は部屋の真ん中に生えている木のほうへ向かう。気のせいか、葉から出る光が先程よりも弱

まっている感じがする。

「でね、〈大いなる葉<sup>ツラン・リーフ</sup>〉の北西に、このカレンドラ王国があるんだけど、この国の北西には、大樹ヴェロニカが生えているんだ。僕はその大樹ヴェロニカの一枝の精霊だよ。ヴェロニカは僕の親であり家であり、食べ物だった。僕は前の魔術師と契約して、ここに移ったんだ」

「待って、一本の木に対して一人の精霊ってことじゃないの？」

「こんがらがってきたので、沙菜はすかさず問う。

「つていうか、食べ物？ その例えはおかしいんじゃない？ ホウラって言葉も意味不明だわ」

「ホウラっていうのはね、生命に宿るエネルギーのことだよ。みんな、これがあるから生きていく。いや、生きているからホウラがあるのかな？」

幽霊は首を傾げる。

「木には最初は一人の精霊しかいないんだけど、長い年月と共に力をつけると、その枝にも精霊が生まれるんだ。僕はその立場。親に比べればずっと力が弱い。それに精霊っていうのは、ホウラを定期的にとらないと生きていけないんだ。とりあえず君に分かつてほしいのは、精霊は人間の魔術師と契約して、その契約者にホウラを分けてもらう代わりに、力を貸すことができるってことだよ」

幽霊の説明は分かりやすいが、エネルギーなんて目に見えない物の話をされても……と、沙菜は置いてけぼりにされているように感じた。右手を上げて、彼に問う。

「それで何で幽霊は死にかけてるの？」

「だから幽霊じゃ……はあ、もういいや」

再三に渡る訂正に幽霊は疲れたみたいで、諦めた様子で説明を続ける。

「契約していた魔術師が二年前に死んでしまっただけ」

幽霊は悲しそうに溜息を吐いた。

「僕は新しい契約者が現れないかと待っていたんだけど……前の契約者は人嫌いで、こんな僻<sup>へきち</sup>地にいたものだから」

「つまり、契約者がいなくて、幽霊は移動できないから、飢え死にしそうってこと？」

「そういうこと。何だ、見た感じより君は賢いね」

「余計なお世話！」

失礼な幽霊に、沙菜はすぐに言い返す。だが、彼の頼み事がようやく分かった。

「その契約を、私としたいのね？ でも、そもそも契約っていうくらいなんだから、結んだら元の世界に戻れないんじゃないの？」

「それは無いよ。約束は守る」

「魔術師っていうのもよく分からないし……この世界には魔法があつて、みんな、普通に使えるってこと？」

沙菜の問いに、幽霊が首を横に振る。

「いや、人間の場合、みんなが使える訳じゃないよ。素養がある人だけだ。ホウラが余ってる人や、ホウラを見る目を持つてる人だね」

「ねえ、私はそんなエネルギーなんて見えたことないけど？」

「君の場合は、ホウラが余ってるタイプだよ。素養があるから、鍛えれば魔術を使えるようになるね。嬉しくなさそうだけど、この世界の人なら喜ぶんだよ。魔術師って高収入だから」

いや、そんな憧れの職業みたいに言われても……と沙菜は苦笑いを浮かべる。

「それになると、太陽の光を浴びたら灰になるとかってことは……」

「ある訳無いでしょ！」

余程突飛な質問だったのか、幽霊はびつくりしたように否定した。

「魔術師は化け物じゃなくて、ホウラを使って魔術っていう現象を引き起こす才能のある人のことだよ。ホウラは生命エネルギーだから、限界以上に使うとぶっ倒れるし、病気になるって死ぬ人もいるけど、そんなの誰でもそうでしょ？ 弱ってる時に無理したら死ぬじゃない？」

「そうね……」

幽霊はごく当たり前のことを言っていた。沙菜は頷いたものの、更に気になることがある。

「ねえ、その契約をして、私が死ぬなんてことはないの？」

「あはは、まさか。僕はホウラのおこぼれをもらうだけだ。契約者が死ぬ程ホウラをもらったら、困るのは僕だよ。君が困ることはほとんど無い。メリットのほうが大きいんじゃない？ だって、人間って家が無いと暮らせないでしょ？」

「……何の話？」

話の飛躍についていけず、沙菜は眉をひそめる。

幽霊は両手を広げてみせた。

「精霊つきの館、人間はそう呼ぶよ。精霊と契約した魔術師は、精霊にホウラを分ける代わりに、屋敷を維持してもらえるんだ」

「よく分からないんだけど、つまり？」

「簡単に言えば、僕と契約したら、君は住まいに困らない。いずれ元の世界に戻る。そして僕の命は助かる。リスクは、ホウラを分けることだけ。人助けができて望みも叶うって、君にとってもいいことだと思うけどな」

何だかキャッチセールスでも受けているみたいな怪しさがあるが、それだけ必死なのだろう。

ちらりと幽霊を見ると、彼は不安そうにじっと沙菜を見つめていた。

沙菜はその時、ふと気付く。

（死にかけて怖いはずなのに、この子、私の返事を待ってくれてるわ。話し方は遠慮が無いけど、良い子なんだろうな）

沙菜の心は揺れた。

（契約しても私が困ることはほとんど無さそうだし、何より家に帰れる一番の近道だわ）

目の前の幽霊に頼るほうが、見知らぬ土地で見たことも無い魔術師を探し出して協力を仰ぐよりもずっと楽だ。沙菜はようやく決意し、大きく頷く。

「分かった。私、あなたと契約するよ」

握手しようと沙菜が差し出した右手を幽霊は嬉しそうに握り返した。といっても感覚は無いが、

それでも気持ちは伝わってくる。

「ありがとう！ それじゃあさっそく、契約の証<sup>あかし</sup>として、僕に名前を付けて」

「名前？ えーと、そうね」

沙菜はちらりと彼の本体だという木に目をやった。葉が光っているのを見ていて思いつく。

「ルーチェはどうか。私の世界でね、外国の言葉で『光』って意味」

「光……うん、いいね。決まりだ、僕の名前はルーチェ！ 契約者、君の名前は？」

「木下沙菜よ」

「キノシタ・サナだね。分かった。——大樹ヴェロニカの一枝と、キノシタ・サナの契約をここに結ばん。我が契約名は、ルーチェ！」

幽霊——改め、ルーチェは朗々<sup>ろうろう</sup>と叫ぶ。

すると、部屋の真ん中に植わっている木の葉が強く緑に輝き、沙菜は眩<sup>まぶ</sup>しさに目を閉じた。

## 第二章 ホウラ集め

葉から発せられた眩<sup>まぶ</sup>い光が消えると、屋敷の様子が一変していた。

沙菜が立っているのは綺麗な聖堂ではなく、ボロボロの家の中だ。部屋の中は暗いが、中央に植わっている木の葉が淡く輝いていて、それが間接照明代わりになっている。

「ボロ屋敷レベル1になったよ！」

啞然としている沙菜に、ルーチェがアナウンスした。

「ボロ屋敷……レベル1……？」

いきなり何だと思いつながらルーチェを見た沙菜は、その姿に驚いた。

「ルーチェ、幽霊じゃなくなってる！」

「だから精霊だってば」

呆れた様子で訂正したルーチェは、もう透けてはおらず、実体を持っていたのだ。宙にふわふわと浮かんでいるのは変わりないが、人形のように整った顔立ちをした十歳くらいの男の子になっている。

真っ白な肌で、子どもらしいまるやかな頬のラインをしていた。明るい緑の目は生き生きと輝き、円筒形をした緑の帽子の下からは銀髪が覗いている。

長袖の白い上着には花の紋様が赤い糸で刺繍ししゅうされていた。ズボンは薄緑色で、緑のブーツを合わせている。帽子や腰のベルト、ブーツには宝石の飾りがついていた。

西洋人の子どものように見えるが、耳が尖っている。コスプレみたいだ。

「ありがとう、キノシタ・サナ！ 生き返ったよ。ああ、空気がおいしい！ 生きてるって素晴らしい！」

ルーチェは思い切り伸びをすると、狭い部屋の中を嬉しそうにびゅんびゅんと飛び回る。

彼をよけて一歩ずれた途端、床板が軋きしんだ。室内には家具が無い。沙菜は天井近くに浮いているルーチェに声をかけた。

「サナでいいよ。それでルーチェ、ここってどこなの？」

「どこって、元いた屋敷だよ。ああ、そっか、説明してなかった」

ルーチェは納得という顔で沙菜の前に下り立った。すぐ傍そばにある扉を示して、外へ誘いざなう。

「さつき精霊つきの屋敷だっけ話しただろう？ この屋敷の成長は、契約者ごとにリセットされるんだ。サナとは契約したてなので、ほらこの通り、ボロ屋敷からスタートだよ」

「嘘お、小さくなってる！」

外に出た沙菜は思わず叫んだ。

朽ち果てた立派な洋館は、今では小さな家になっていた。赤い屋根をした一階建てのウッドハウスといった感じだ。ルーチェは沙菜の服を引っ張って、今度は後ろを振り向かせる。

「敷地の広さ自体は変わらないんだけど、畑や庭もリセットされたよ」

「更地さらちになってる！」

雑草だらけだった庭は茶色の地面になっていた。

門扉もんぴや塀はそのままだけで、黒い犬——シャドウが相変わらず向こうからこちらを見てうなづいている。

不安が顔に出たらしく、ルーチェがやんわりと沙菜を力付けた。

「守りは大丈夫だから、安心して。あの程度の狼のシャドウに、僕の結界は破れない」

「けっかい……？」

あれは犬ではなくやはり狼なのか、と沙菜は心の中で呟つぶやいた。

「目に見えない壁、と言えば分かるかな。僕もシャドウに食べられたくないもの、守りはしっかりとっておかないとね」

「あのシャドウって生き物、ルーチェのことも食べるの？」

沙菜の問いに、ルーチェは頷うなずく。

「そうだよ、奴らの餌えさはホウラと生き物の血なんだ。だから動く物に噛かみついて、血ごとホウラを奪うんだよ。でも、あいつらは太陽の光を嫌うから、昼はその辺の陰に隠れてる。そして夜になると、また出てくるんだ。夜は無闇むやみに歩かないようにね」

「分かった」

沙菜はしっかりと頷うなずいた。

あんな物が門の外にいる時に、絶対に歩いたりはいしない。

「でもそんな危ない生き物があるんなら、駆除すればいいんじゃない？」

「シャドウバスターっていう人達が狩ってくれるけどね、シャドウは新月のたびに生まれてくるんで、きりがないんだ。小物は放っておかれる場合が多いよ。危険度の高い大物ならどうにかしようとするんだけど……」

そこでルーチェは脅かすように声を潜める。

「奴らは特に、人間を好むんだ。生き物の中でも、ホウラの量が多いからね」

「なるほど……気を付けるわ」

沙菜は頷いたものの、あんまり気遣う必要は無いのではないかと能天気と考えていた。ちらりと藍色の空を見る。

空には星が瞬き、弓形の月が一つ浮かび、すっかり夜になっていた。

「それでルーチェ、私、すぐにでも帰りたいんだけど」

契約が済み、ルーチェも生き返ったのだから、さつさと元の世界に帰りたい。そう願った沙菜に、ルーチェは意外な返事をした。

「今すぐは無理だよ。僕が成長すれば帰れるけど」

「どういうこと？」

沙菜はルーチェに詰め寄る。

「だって、契約すれば帰れるって言ってたでしょ？ 詐欺じゃない！」

この訳の分からぬ夢を終わりにできると安心していった沙菜は、期待が外れて怒りすら覚えた。噛

みつくように言ったが、ルーチェに冷静な返事をされる。

「僕はちゃんと言っただろ、いずれ元の世界に戻るって」

「確かに……！」

沙菜は頭を抱えた。

「だったら、いつ戻るの!？」

「落ち着いてよ」

声を荒らげる沙菜に両手を向けて、ルーチェはどうどうと押しとどめる。

「今の僕はレベルが低すぎて、サナを帰したくてもできないんだ。ホウラをたくさん集めてくれれば、僕は成長する。そうしたら力が強くなるから、そのタイミングで元の世界に帰してあげるよ」

「レベル……？」

まるでゲームみたいなことを言い始めたルーチェに沙菜は眉をひそめた。だがそういえば、先程も彼がレベル1と口にしていたことを思い出す。

「何それ、どういうこと？」

「ホウラがあると、僕と屋敷が成長していくんだよ。この家もボロ屋敷から、どんどん立派になっていくってこと。僕ら精霊は、契約した魔術師に特殊な住まいを提供するっていう形で、手を貸すことができるんだ。その代わりにホウラを分けてもらうんだよ」

理屈は分かったが、沙菜は首を傾げる。

「それって魔術師だけが得してるんじゃないの？」

「そんなことは無いよ。宿っている木を守ってもらえるし、僕みたいな未熟な枝が親から離れても、ホウラをもらいながら成長していける。それに何より、人間と一緒にいるのってとても楽しいんだ。宿っている木から離れられない僕らにとつて、退屈から抜け出すって大きなことなんだよ」

分かったような、分からないような。とりあえず、ルーチェのような精霊が退屈を嫌っているらしいことは理解した。

ルーチェは両腕を広げて更に言う。

「サナ、君が元の世界に戻る為には、前の屋敷の大きさまで成長できたら問題無い。僕は太樹ヴェロニカの一枝だからね、ホウラさえあれば、すごいんだ」

ルーチェが誇らしげに胸を反らした。

「ホウラさえあれば、ね……」

沙菜は皮肉っぽく笑った。そこでふと、ルーチェの言葉に引っかかりを覚える。

「とういか待って、さっき『集めてくれたら』って言ってたわね？　もしかして私が集めるの？」

「そうだよ。僕は敷地の外には出られないからね」

「外に出るの？　あんな怖いのがいるのに？　それに私、疲れて喉が渴いたしお腹も空いたわ……」すぐに帰れないのだと思ったら、余計に疲れてきた。まるで子どもみたいに訴えると、ルーチェが心配そうに見つめてくる。

「そうだね、まずは食べ物と水からだ。衣食住を満たさないと、人間は弱って死んでしまうものね」

ルーチェは両手をパンツと合わせた。そして手を広げると、宙に五本の小瓶が現れる。

突然の手に、沙菜はあんぐりと目と口を開いた。

「サナってば、顔から目が落っこちそうだね」

くすくすと笑い、ルーチェが小瓶を宙に浮かべたまま、床へ下り立った。

「今のが魔術なの？　すごいファンタジーね」

「ファンタジー？　君の言うことは謎だけど、魔術かという質問はその通りだ。でもこれは精霊しか使えない部類の物だよ」

ルーチェは小瓶を三本だけ床に置き、二本を沙菜に手渡す。フラスコのような底の丸い瓶には、それぞれラベルが付いている。不思議な形の記号が一つだけ書かれていた。

「サナ、これはホウラを集めるのに必要なアイテムなんだ。まず、ホウラには五つの種類がある。地、水、火、風、光だよ。この二つの瓶は、地と水だ。ほら、印がついてるだろ」

「この記号のこと？」

「そう」

ルーチェは頷いて、沙菜が持っていた一本を手を取った。

彼がどうして急にアイテムの説明を始めたのか分からないが、沙菜はとりあえず瓶を見してみる。

「ルーチェ、あのさ」

「まあ、まずは僕の話聞いて」

言いたいことが分かったのか、ルーチェは沙菜の言葉を遮って続ける。

「これの使い方を教えるよ。まず蓋<sup>ふた</sup>を取って、瓶の口を自然界の物に押し当てる。それだけで、その物が持つホウラが瓶の中に移動する。中身がいっぱいになると青く光るから、蓋<sup>ふた</sup>を閉めて僕の所<sup>ところ</sup>に持ってきてね」

物に瓶の口を押し当てるだけとは簡単だ。

沙菜は思い浮かんだことを質問する。

「えっと、生命が持つエネルギーがホウラだったよね？ でも自然界の物ってなると、石とか木とかも含まれると思うんだけど、どうなの？」

「分かるよ。生命って聞くと、自分で動く物を考えるんですよ？ シャドウは動くやつしか餌<sup>えさ</sup>にしないけど、ホウラはこの世界の物には何にでも宿<sup>すく</sup>ってるんだ。その辺の石ころにもね。ただ、動かない物の場合は大地の持つホウラを吸い取ってるだけで、自分で作り出してる訳じゃないよ」

「え？ だったらルーチェも、大地からホウラをもらえばいいんじゃない？」

沙菜の問いに、ルーチェはうんうんと頷<sup>うなず</sup>いた。

「そう来るよね。大地の持つホウラは、うーん、霧<sup>きり</sup>みたいな物なんだ。だから石のような動かない物は、長い時間をかけてホウラを吸い取って蓄<sup>たくわ</sup>えるんだよ。だけどそれだと僕には足りない。霧を食べるのと湧水<sup>わうすい</sup>を飲むのじゃあ、全然違うだろう？」

「霧<sup>きり</sup>じゃあ、喉<sup>のど</sup>は潤<sup>うるお</sup>わないわね」

「そういうこと！ ちなみに小さい石にはあんまりホウラは含まれてないんだ。それでも探せば、長い時間をかけてたくさんのホウラを溜<sup>ため</sup>め込んだ石もあるよ。ただそういうのは、すでに魔術師が

ホウラ集めに使<sup>つか</sup>ってることが多いから、期待できないけど」

何だか充電器<sup>充電器</sup>みたいだなと、沙菜は思った。

大地のホウラを石が吸い込むというのは、地面にコンセントを差し込んで充電する感じなのだろうかと、想像してみる。その充電速度<sup>充電速度</sup>がめちやくちや遅いということに違<sup>ちが</sup>いない。

「動く物だと違うの？」

「植物や動物は、ただ生きているだけでホウラを作り出す。吸い込んで蓄<sup>たくわ</sup>える石とは全然違うよ。中でも、人間は作れるホウラの量が飛び抜<sup>ぬ</sup>けてる。魔術師は特にそうだね」

「ふうん、なるほど」

精霊が魔術師と契約する理由がまた一つ明らかにになり、沙菜は頷<sup>うなず</sup>いた。

ルーチェは小瓶を示して、説明を続ける。

「今の僕は、まだボロ屋敷レベルだから、その辺の小石でもすぐ、瓶がいっぱいになるよ。僕がホウラをもらって、成長するだろ？ 瓶も大きくなるんで、また集める。その繰り返しだ」

「ルーチェ、あなたが成長するのは分かったけど、それじゃあ私のお腹は膨<sup>はふ</sup>れないわ」

沙菜はちらちらとバケツの中のタケノコを思い出しながら言った。

空腹<sup>こうぷく</sup>なので、これをかじろうかと考えているところだ。収穫<sup>とと</sup>したてなら生でも食べられるが、もう三時間以上経<sup>へ</sup>っている。えぐみが出ているかもしれないものの、背に腹は代えられない。

「ごめん、そんなに力<sup>ちから</sup>り力<sup>ちから</sup>りしないで。空腹<sup>こうぷく</sup>になると人間って凶暴<sup>きやうぼう</sup>になるから怖いよね」

ルーチェは謝りつつも、ぼそりと呟<sup>つぶや</sup>いた。沙菜はカチンときたが、確<sup>たしか</sup>にお腹<sup>はら</sup>が空<sup>そ</sup>いて苛<sup>いら</sup>立<sup>だ</sup>って

いる自覚はある。目で続きを促すと、ルーチェが口を開く。

「屋敷が成長する時、集めるホウラの種類によって、できる設備が変わるんだ。たとえばこの地のホウラ、これは畑や家具、日用品や金属製品に変わるよ」

「え!? 地のホウラから家具ができるの? どういう理屈?」

「そこが精霊の力ってやつさ」

ルーチェは自慢げに言う。

「僕は一枝だから、契約者ごとにリセット型の契約しかできないんだけど、大樹の精霊なら子孫に引き継ぐ血の契約もできる。子子孫孫で館を受け継いでいる魔術師の一家もいるよ。この国の王城——カレンドラの城とかはそうだね」

「お城……スケールが大きいわ」

沙菜がうなると、ルーチェが慌てて手を振った。

「あ、僕は無理だよ。前の魔術師の館くらいの大きさまでだ。大樹ヴェロニカならできただろうけど……もう死んじゃったから見せてあげられない」

ルーチェは悲しそうにうつむいた。

「そうだったのね。つらいことを言わせてごめんね。そんなに落ち込まないで」

ルーチェはヴェロニカの枝だということなので、その大樹は親みたいなのなのだろう。家族を失ったという点で、ルーチェは寄る辺の無い沙菜と変わりはない。沙菜はルーチェの頭を撫でた。

「僕は親木から離れたけど、死んだと聞くとやっぱり悲しいんだ。ヴェロニカは優しかったから」

溜息を吐いて、ルーチェは首を横に振る。

「でもそれより、サナのことだよ。とにかくね、ホウラの種類ごとに屋敷のどこかが成長するんだ。水のホウラなら井戸だね。僕がどうしてホウラ集めの話をしたか、分かった?」

「うん」

沙菜は頷く。携帯のアプリゲームでよくあるような、野菜や動物を育ててレベルを稼ぎ、家を豪華にしていくゲームと似た感じだろうかと考えた。

ひとまず、ホウラという物を集めていけば、ルーチェが成長し、生活に必要な物が手に入るという仕組みを理解した。

「でも、ホウラって敷地の外に集めに行かないといけないんでしょう? あのシャドウがいなくなるまで、何もできないのね」

門扉のほうを眺めて、沙菜はがっかりした気分で呟く。

喉が渴いているが、朝までは何とか耐えられるだろう。あのままだと遭難していたのだと思えば、今の状況はむしろ幸運だ。

自分に言い聞かせて、ぐうぐうと鳴るお腹に手を当てていると、ルーチェが部屋を指差した。

「サナが持ってた植物にホウラがいっぱい含まれてたよ。あれなら井戸とベッドくらいは作れそうだ」

「え、本当?」

沙菜は急いでボロ屋敷の中に戻り、置きっぱなしにしていたバケツとスコップの側に座り込む。

ルーチェは宙に浮かんでついていた。

沙菜はバケツからタケノコを取り上げて、ルーチェに見せる。

「これ、私の世界の食べ物なんだけど……。このタケノコにもホウラがあるの？」

「うん。植物は地と水の水ウラを含んでるんだ。ほら、試しに小瓶の口を当ててごらんよ」

「やってみる」

沙菜はルーチェに促されるまま、バケツの中にある六本のタケノコのうち一つを取り上げて、岩の絵の瓶の先を押し当ててみた。二本目のタケノコに押し当てると、無色透明だった瓶の中に青い光が灯る。

「それで満杯ってことだよ」

ルーチェが横から教えてくれた。

「すごい、タケノコ二つでいっぱいになるの？」

これは思ったより、元の世界に戻るの簡単なのではないだろうか、と、沙菜に希望が芽生える。

「水の瓶でもやってみて」

「オーケー」

こちら、タケノコが二本で瓶がいっぱいになった。青く光る小瓶に蓋をしたところで、ルーチェが両手を差し出す。

「瓶を僕にちょうだい。今日のところは、井戸とベッドを作ればいい？」

「いいよ、そうして。今日は仕方無いから、水でお腹を満たしておくわ」



「分かった。じゃあ、いただきます！」

瓶の蓋ふたを開けて、ルーチェは中に入っていた青色の光の玉を口へ放り込んだ。ルーチェの体と部屋の中が一瞬、緑色に光る。

「すごい！ ベッドだ！」

光るほうを見ていると、窓際に、床から湧くようにしてベッドが一つ現れた。

「魔法だわ、すごい。意味分らないけど、すごい！」

沙菜は歓声を上げ、ベッドへ近付いて、恐る恐る布団に触れてみた。

緑のチェックの布団と枕がついた、ごく一般的なベッドだ。ふかふかしていて、日なたのにおいがする。

ルーチェが窓から外を指差す。

「外に井戸ができたから、水を汲くんでくるといいよ」

「本当だ。分かった！」

確かに家の前、玄関から見て右側、更地さらちだった場所に井戸ができています。

沙菜はすぐに外へ飛び出した。幸い、月明かりでよく見える。

「どうしよう。こんな井戸、歴史資料の施設でしか見たことない」

釣瓶くわのついた石組みの井戸の前で、沙菜はたじろいだ。使ったことはないが、井戸の水汲くみが大変だという話が童話に出てくるので、重労働らしいことは知っている。

とりあえず桶を一つ、底へ放り込んでみた。ポチャンと音がしたので、もう片方の綱を引いて、

せつせと水を汲くみ上げる。確かにこれは大変だが、水を飲めると思えば苦ではない。

水がいつぱいになった桶を手元に引き上げると、手を洗い、さっそく水を飲んでみた。

「おいしい！」

お腹がいつぱいになるまで飲み、満足したところで家の中に戻る。そこで、沙菜は切羽詰せつぽまった問題に気付き、すぐにルーチェに訊きいた。

「ねえ、ルーチェ。お手洗いつてどのホウラ!?」

トイレは大事である。

残りのタケノコから水のホウラを取り出すと、ルーチェに頼んですぐにトイレを作ってもらった。いったいどこに流れていくのか分からないが、水洗式だ。トイレトパーパーの代わりに、幅広の葉っぱがいくつか積んで置いてあった。

「ここにトイレトパーパーって無いの？」

「といれとパーパー？ よく分からないけど、前の契約者が使っていた物をそのまま用意したよ。排泄しなきゃいけないなんて、人間って不便だよね」

「生まれた時からこうだから何とも思わないわ……」

沙菜は疲れの滲にじんだ返事をして、バケツのほうに行く。ルーチェの宿る木の葉が光っているの、夜とはいえ歩き回るのには困らない。

「もうえぐみが出ちゃってるかなあ、試しに一口。……うえっ」

水だけだと物足りず、何でもいから食べてみようと思った沙菜はタケノコの皮をむいてかじつ

てみる。けれど、時間が経ちすぎていて、生では食べられなくなっていた。

「本当は米のとぎ汁でゆでたいけど、水にさらしておくだけでも違うわよね」

明日の朝ご飯にしようと、二本だけ皮をむく。井戸水を汲んでバケツに入れ、中にタケノコを浸した。虫が湧くと困るので、バケツは玄関に置く。

そして、もう他にできることが無くなった沙菜はベッドに腰掛け、深い溜息を零す。

自然と元の世界にいる家族のことが思い出された。

（おじいちゃんとおばあちゃん、びっくりして倒れてないといけど……）

七十歳に近い祖父母は、年齢よりも若くてしつかりしているが、孫が突然行方不明になったのだから、かなりの心労があるに違いない。沙菜から目を離れたと両親が怒って祖父母を責めたらと考えると、胃が痛くなった。

沙菜は一人っ子なので、その分、両親は自分を気にかけてくれている。心配する顔が頭に浮かび、どんどん気持ち沈んでいってしまう。

（それに、無事に帰れたとして、仕事……どうしよう）

働いているカフェの店主夫妻を思い浮かべ、更に憂鬱がひどくなった。

（良い人達だけど、流石に無断欠勤は怒るよね）

不安で落ち込むものの、連絡手段が無いのだからどうしようもない。諦めるしかなかった。外国どころか、異世界なのだ。手紙すら届かない。

鬱々としてきた沙菜は部屋をぼんやりと眺めて、現状が素晴らしく幸運だと思い直そうと努力

した。

（急に知らない場所に放り出されたのに、安心して過ごせる家があるってすごいわ。しかも家賃がタダ。光熱水費だってからない。当面の食べ物はどうにかするだけで良いなんて、ついてる）

すると、少し元気が出てきた。

（それに暑くも寒くも無い季節で助かったわ。これがものすごく寒い時季だったら、凍死の心配があったよね）

昼間の森に放り出されたお陰で、シャドウに出くわさなかったことも運が良かった。

そしてこの屋敷を見つけたことが、最大の幸運だ。

「ルーチェ、ありがとう！」

沙菜は天井に浮かぶルーチェにお礼を言った。ルーチェは不可解そうに、眉を寄せる。

「落ち込んでたかと思えば、笑顔でお礼って……今回の契約者は変わってるなあ。服装もだけど、すごい変だね、サナって」

「あなたのほうがよっぽど変よ」

礼を言った自分が馬鹿だったと、沙菜は溜息を吐いたのだった。



トントんと包丁がまな板を叩く音がする。香しいにおいは、味噌汁だろうか。